

lovers

和宮龍太郎

「わたしが死んでしまっても、まだ私のこと好きでいてくれる？」

「もちろん」

「でも、わたし自身はいないんだよ？灰になってるんだよ？」

「かなえの肉体が消えてしまっても、かなえのことは絶対に忘れないよ」

「もし他に好きな人ができたらどうするの？」

「かなえより素敵な人なんていないよ」

「ずっと一緒にいたらいいのに」

こんなパターンの会話はもう何度かした。かなえの最後のセリフはいつも同じで、一緒にいたい、だ。僕はかなえが感じているはずの恐怖とか心配事を払拭してあげたい、って考えているけど、結局何をどう言えばいいのか分からない。言葉は相手に届かなければ意味はなさない。言葉だ。今のかなえは僕が経験したことの無いことを経験しようとしている。

かなえの病気がかなえの命を脅かすもので、そのせいでかなえが僕のところからいなくなってしまうことを知ったとき、何かのっぺりとしたものを頭から掛けられた気分だった。かなえがいなくなっても、僕がこの先歩いていく道は今までの世界と同じ線上に存在するだろうか。そういうことを考えるときはいつも、目をつぶって一本の細い線の上を歩いている気持になるのだ。

「りんごが食べたーい」かなえのリクエストで僕はいつものようにりんごの皮を剥き、食べやすい一口サイズに切りそろえる。

「りんごうまく切れるようになったね」

「そうだね。最初は全然できなかったけど」

「こんなに上達したのも、わたしが入院したおかげでしょ？」

「ははは。そうだね」

「思うんだけどね、わたしが入院していなかったら、今頃わたしたちどうしてるかな？こういうこと考えるとしんどくなるけど、こんなに二人でまったり過ごせたかな？」

「たしかにこんなに二人で過ごす時間はなかったよね？しかもりんごも上手く切れないだろうし」

「わたしが入院してよかったね」

冗談で言っている雰囲気のかなえから全く死への恐怖なんかは感じられないけど、きっとすぐ

く怖いに違いない。

僕はかなえの病気が治ると信じているし、彼女への愛がそれを実現するのだと信じている。かなえがいなくなってしまうことは頭のどこかではわかっているけれども、かなえが生き続けることを信じることができなくては、かなえを愛していることにはならない。愛するとは信じることなのだ。少なくとも今の僕にとってはそうである。

かなえが外に出たいと言う。そんなことをすればかなえのやせ細った体に負担が重くのしかかり、病気を進行させてしまうから、もちろん僕は同意しない。それでも、とかなえが言うから、僕は担当医に掛け合っ話をつける。

「それでどこに行きたいの？」

「彦根城でひこにゃん見たいな」

「彦根ってここから二時間以上かかるよ。大丈夫なの？」

「いいからいいから早く行こ」

かなえを車椅子にのせて、僕たちは彦根城でひこにゃんを見る。思ったよりも背が低くてかわいらしい。かなえは車椅子だから、前の方で見学させてもらう。お尻をぷりぷりさせるひこにゃんを見るかなえの笑顔はいつもと変わらなくて、僕はほっとする。

そのあと、彦根城の庭園を見学する。緑がきれいに映え、植物の生きる力強さを感じる。僕たちが庭園から彦根城の天守閣を見ていると、外国人と日本人のカップルが声をかける。

「写真を撮ってもらっても構いませんか？」

「全然、大丈夫ですよ」と僕は言って、彦根城をバックに写真を撮ってあげると、お礼にと日本人女性が、彦根城をバックに僕たちのツーショットを撮ってくれる。

デジカメで撮った写真をかなえが確認する。下を向いて確認しているので、かなえがどんな表情をしているのかわからない。こうしていつまでもデートできたらいいね、ごめんね、とかなえは言うが、またしても僕はかなえに対して何も言えない。

その夜、かなえの容態は急変する。かなえの顔は青白くなり、どんどん生気がなくなっていくように見える。担当医からは「今日が山場」と伝えられる。呼吸器を付け、うっすらと頬に陰を落とすかなえを前に僕はかなえの回復を祈るしかなくて、信じるしかないことに気付く。かなえの細く青白い手を握りながら、僕はかなえを信じる。

かなえの苦しそうな顔と青白く生気のない腕を見て、僕はかなえの死を覚悟する。もしかなえがいなくなれば、このかわいい手を握れなくなる。そんなの絶対に嫌だ。僕の将来にはかなえが必要なのだ。いや、待てよ。さっきもそうだが、僕はかなえがいなくなった後の、『自分』の将来のことばかり考えている。かなえの苦しみを理解せずに、僕は自分のことばかり…。想像力の欠如。一番大切な人を前に、僕は優しさのかけらもない。かなえを前に僕は適切な言葉もかけられない。そんな自分が嫌いだ。結局、僕は、僕自身のためになんかかなえが生き続けることを信じていたのだ。恋人の死を受け入れず、死んでいく恋人の気持ちを想像し理解しようとしなかった自分を恐ろしくも感じる。

かなえの容態は少しずつ回復して、かなえの顔色もだんだんと良くなる。もうあとは安静にしていれば、明日になればけろっとしていますよ、という担当医の言葉に再びほっとして、かなえの顔を見る。そして僕は覚悟を決める。

いつもより看護師が慌ただしく廊下を走っているな、危ないな、と感じたある朝、かなえへの病室に行くと、そこになんかかなえの姿はなく、代わりに担当医が僕を待っている。

「いやあ。今朝方からかなえさんの姿が見えなくて。みんなで探してるんだけど見つからないんです」

そうなんですか、と驚いている僕に、担当医はマスキングテープでかわいらしく装飾された、いかにもかなえが作ったらしい手紙を手渡す。

「今日最初になんかかなえさんの病室に入って看護師が見つけたものなんですが」

それは僕宛の手紙で、やっぱりかなえからだ。茶色いチェック柄のマスキングテープが手紙の端に装飾され、かわいい羊のイラストが付いている。そこにはただ、外出しまーす。心配しないでね、と書いているだけだ。心当たりはないですか、と担当医に聞かれたが、もちろん僕は知らない。

「どこに行ったんでしょう」と困り果てた顔の担当医は病室から出て行った。

僕は、かなえのベッドの隣に置いてある椅子に腰掛けてかなえを待つことにする。彦根の帰りになんかかなえの容態が悪くなったことを思い出したが、心配ないだろうと自分に言い聞かせる。かなえは僕が思っているよりも強いのだ。

僕は小説を読むことにする。舞城王太郎の『好き好き大好き超愛してる』だ。今の僕にはリアルに感じて途中で読めなくなる。なんでこんな本を鞆に入れたんだろうと後悔するが、なんとなくかなえに対して気持ちの整理がつく。

それから昼寝をした僕は窓際に立って、駐車場を見る。色んな車が停まっていて、夕日がフロ

ントガラスにまぶしく映っている。ガラスに反射した光が体の中にじわーっと入って来る。

かなえ、どこに行ったんだろ？っていう気持ちがだんだん強くなって、かなえのことが気になり始める。もしかして男と会ってんじゃないだろなーとか、友達と遊んでるのかっていう、余計な妄想が広がって止まらない。

そして僕はかなえに一本とられたことに気付く。

廊下でばたばたと走る音が聞こえたと思ったら、ただいまーと声がしてかなえが帰ってくる。病室のドアからひょっこり顔を出したかなえは笑顔で、顔色は生き生きとしたピンク色。体調は良さそうだ。どこに行ったの？と僕は、まずはおかえりと言うべきだろーと思いながらかなえに聞くが、

「教えなーい」

「ねえ、わたしのこと心配した？」

「当たり前じゃないか、今日は朝からどこに行ったの？もう夕方の五時だよ」

「今日のことは秘密なの」と、かなえはまた笑顔になる。

「えっ、気になるし心配だな」

「えへへ、いっぱい心配して」

それにしても、今日のかなえはなんだか嬉しそうで、ずっと笑顔だ。僕は少し顔が引きつっていたのかもしれない。その僕の顔を見てかなえが変な顔～、と言って喜んでいる。